ベルリン・フンボルト大学森鷗外記念館副館長

ベアーテ・ヴォンデ氏によるドイツ文化講演会

ベアーテ・ヴォンデ氏は、平成30年11月３日に開催された北九州マンホールサミットに招待されました。これを機会に、北九州日独協会においてヴォンデ氏の講演会を企画しました。100年以上前の異国での出来事、しかも専門外の内容を白紙の状態からよくここまで詳らかにされたと、同氏の研究者としての熱意と力量に感銘を受けました。流ちょうな日本語でユーモアを交えながら最初から最後まで興味深いお話でしたが、紙数の制約もあり編集してその概要を紹介します。

講演題名

知られざるお雇い外国人　ヴィルヘルム・ヘーン
日本警察の父と呼ばれたプロイセン警察大尉の日本での足跡とその生涯

はじめに

こんばんは、ベルリン森鷗外記念館のベアーテ・ヴォンデと申します。今日皆さんに招いて頂き、ベルリン森鷗外記念館の活動について講演できることはとても光栄でございます。

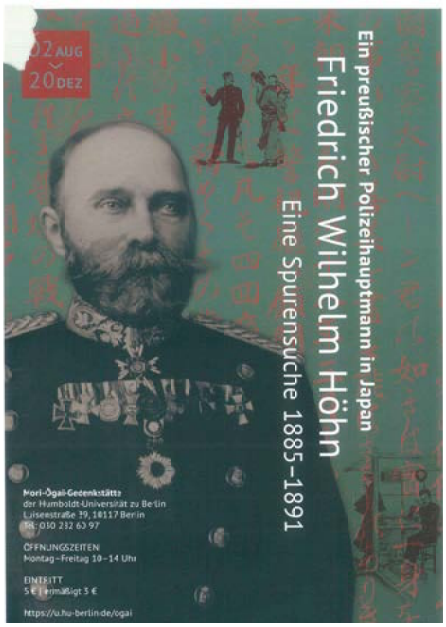
講演するベアーテ・ヴォンデさん

私は一年前にも北九州市に来ましたので、今年、このような機会を得るとは思いませんでした。今日は、警察関係の話を皆さんにお話します。警察というと、ちょっと怖い感じを持ちますね。しかし今回の取材で、ベルリンの警察署長から毎月のように手紙をもらい、彼はあなたの恋人かと聞かれるほどでした。

一本の電話から

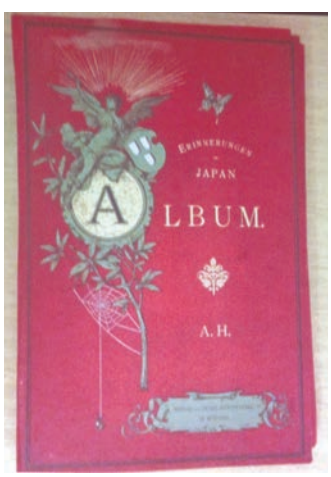
このテーマの調査は、一つの電話で始まりました。私の故郷の歴史家が、私どもの記念館に電話してきました。昔、その地方の誰かが日本の警察関係の仕事をしたと耳に入ったのです。ベルリン森鷗外記念館は、ドイツ人から見ると日本の情報センターのようなものです。私たちは日本については何でも知っていると思われており、専門外のことでも色々と問い合わせがあるのです。

私は、ヴィルヘルム・ヘーンという名前を聞きましたが、思い当たる人はありませんでした。明治時代のお雇い外国人の資料、手紙類を調べましたが、ヘーンの名前は出てきま



ヘーンの肖像（展覧会ポスター）

日本に残るヘーン関係資料



赤いアルバム

せん。インターネットで調べても分かりませんでした。時間をかけて調査を進めたところ、九州の日独文化人物交流史という記事を見つけ、ヘーンが、日本の警察の父と呼ばれていること、博多にある亀山上皇の銅像（1894年完成）のために10円を寄付したこと等の情報を得ることができました。この時代10円は、高額の寄付だったろうと思います。また、最近の調査で、福岡県警察資料室に「ヘーン氏警察意見」という資料があり、その中で、ヘーンは日本の伝統的駐在所である交番を今後も守るべき制度と高く評価してという記述がありました。私はこの点にとても興味を持ちました。

博物館の長い夜

ところで、ベルリン鷗外記念館は、ほかのベルリン市内の博物館とのつながりがあります。特に毎年８月の最後の土曜日行っている「博物館の長い夜」では、80館におよぶ市内の博物館が参加して、夜６時から朝２時まで全館をオープンするという特別なプログラムがあります。その準備のための会議があり、他の博物館長と皆知り合いになって友達となるわけです。その会議で、警察博物館の女性館長と話しをしたところ、一週間ほどして電話があり、そこに日本に関する資料があるというのです。訪ねてみると、彼女は赤い色のアルバムを見せてくれました。その中には、ヘーンの日本滞在中の３冊の日記がありました。古いドイツ語が鉛筆で書いてあり、水濡れもあったりして大変読みにくいものでした。どうやって研究したら良いか、壁にぶつかりましたが、昔キリスト教の出版社で働い

ていた80歳のアーティストの友達がいて、彼女が古いドイツ語を全部清書しタイプすると約束してくれました。但し、条件があり、この資料を展覧会の形で、ヘーンの故郷に戻しほしいというのです。私は約束し、その実現に努力することとしました。

この日記の中には、日本国内での色々な経験について書いてあり、例えば、旅行行程が詳細にリストアップされており、日本の食事についても記載されています。面白いことに、ヘーンは日本の食事があまり口に合わなかったらしく、ドイツに色々な種類のソーセージ、ザワークラウト、バターなどを注文しています。また、この赤いアルバムの中にいくつかの写真が載っていました。東京の三囲神社にあるヘーンのための記念石碑、当時の新聞記事などです。東京にはリニューアルされたばかりの警察博物館がありますが、そこにヘーンの記念碑の拓本がありました。長さが3メートルもあるとても大きなものなので、写真を撮るのに苦労しました。博物館の二人の職員のご協力で何とか写真に撮り、展覧会用に2メートル縮小して使うことにしました。この博物館は皆様にお薦めできる博物館です。

ベルリンの国立図書館、ドイツ連邦資料館にも、明治時代、日本で活躍したドイツ人の記録が残っていました。ビゴーというフランス人スケッチ画家の当時の警察業務のスケッチが書かれた本が、フランスの古書店で見つかり、2000ユーロで購入しましたが、大変珍しい本で、参考にすることができました。

ヘーンの経歴

さて、フリードリッヒ・ヴィルヘルム・ヘーン（1839―1892）は、ドイツとポーランドの国境に位置するオーダーブルフ地方に生まれました。彼の父は、風車で油を搾る職人でした。彼は5歳上の未亡人ルイーズと結婚しましたが、その後ヘーンの弟も彼女の妹と結婚しました。家族の家系を調べると面白いことがでてきますね。ルイーズにはマリアナという娘がおり、彼女の写真がそのアルバムに残されています。残念なことに、ヘーンとルイーズの子どもたちは生まれた日に亡くなってしまい、二人の間の子供を授かることはできませんでした。ヘーンの息子達は、彼が教育した日本の若い警察官だったといえるかもしれません。

ヘーンはその後軍隊に入り、1866年のケーニッヒリッツの戦いで功績をあげ、ウィヘルム・カール皇太子から軍刀を授与されています。彼は軍隊でのキャリアを歩みたかったのですが、のどの病気のため断念し警察官になる決心をしました。臨時の警察官として2年間働いた後、正式に採用され、警察のすべての部門で働きました。普仏戦争で再度兵役につき大尉となりましたが、戦後、ベルリンの警察署に戻りました。当時、ベルリンには日本から6名の警察官が派遣されており、ヘーンは彼らの面倒をみました。それで、日本の山県有朋からドイツ政府に警察官派遣の要請が来た時、彼が対応することとなったのです。ヘーンのほかにもう一人派遣されましたが、2年後病気で帰国し亡くなってしまいました。

日本での活躍

1885年3月、ヘーンはプロイセン警察大尉という肩書で、奥さん、娘さんと共に来日しました。当時東京では、清浦奎吾が山本有朋と共に警察学校、警察練習所を開設し、警察制度の改革に取り組んでいました。今、日本の警察の父と呼ばれる人は、川路民義ですが、彼は早く亡くなり、その後、警察局長を務めたのが清浦奎吾で、ヘーンの在日時期と重なります。山県と清浦はどうもドイツ派だったようですね。ヘーンは当初3年間の滞在予定で、警察訓練所で教鞭をとりましたが、2回延長され6年間日本で活躍しました。この間、ヘーンは、大変多くの科目について講義を行いました。ドイツの警察法の他にも、衛生学から動物医学等、その内容はとても広い分野にわたっているのです。例えば薬品の使い方から吉原の検査のことなど長いリストが残っています。消防も当時警察の所管でしたので、ヘーンが講義しています。また、興味深いことに、共産主義宣言についても紹介していました。勿論、彼は共産主義者だったわけではありません。日本語の共産主義宣言は1904年に発表されましたので、ヘーンはその20年も前にこれを教材として使い、その運動がどのようなものか教えたのです。本当に驚くべきことです。

ヘーンはその時代の有名人でした。6人もの通訳がつき、彼の言動は詳しく記録され、彼が何かやると必ず新聞が報道しました。彼の奥さんと娘さんも色々な活動をしました。ドイツ式の組み紐を無料で教える学校を作り、日本の若い女性が自分の生活を維持できるように教育しました。また、日本の警察官にドイツ語を教える教室も作りました。このような貢献は、ほかの分野のお雇い外国人の家族からは聞いたことありません。

ヘーンは1989年以降、日本全国を旅行して回りました。各地の警察機関、刑務所等を視察することが目的でしたが、その回数は9回にもおよび、北海道から沖縄まで訪問しました。この時のことが、公式な報告書以外に、私的な日記として3冊残されています。第8回目は九州の旅行でした。この時は福岡から奄美大島まで行きました。当時外国人はそんなに自由に旅行できませんでしたが、どこでも交番や駐在所があったので、ヘーンは比較的自由に旅行できたようです。1890年の3月までに30県を訪れており、当時のお雇い外国人の中で最も日本を知っている人でした。その日記には、民間の人々との交流の様子が記されており、沖縄では、色々な道具をプレゼントされています。これらの品は、今、ベルリンの民族博物館や大学の博物館にあります。ヘーンが1891年のドイツに帰国する

折、その送別会には、約400名の教え子達が参加しました。皆で寄付を集め、送別の品として、侍の装束一式をプレゼントしました。これはとても価値のあるプレゼントだったと思いますが、残念なことに第二次世界大戦の中で失われてしまいました。ヘーンは絵葉書を作って生徒のみんなにサインしてプレゼントしています。

帰国後

帰国後、ヘーンはベルリンに戻って警察局で仕事をつづけましたが、1892年に病気で亡くなりました。これは日本の関係者にとっても大きなショックなことで、日本の内務大臣が未亡人宛に弔意の手紙が送られ、これが残されています。ベルリンの警察の仲間と家族が立派なお墓を建てましたが、これも大戦の中で野原に帰し、残っていません。

一方、日本では、友人と生徒達がお金を集めて、1894年に記念碑を作りました。これが三囲神社にある記念碑です。表題は山形有朋の字で、文章は清浦圭吾が書いたものです。とても印象的な内容です。この記念碑は、1940年に修復され、ヘーンの没後50周年にあたる1942年に序幕式が執り行われました。第二次世界大戦当時の日本とドイツの新しい関係が表されているように思います。除幕式には、日本の警察関係者の他にドイツ大使館の人たちも出席しました。

最後に

今回、展覧会の開催のために色々な資料を集めることができ、ヘーンとその家族の日本における活動、貢献について紹介することができましたが、将来、これらを本にまとめたいと思っているところです。また、ヘーンが持ち帰った美術品などは、ヘーンが亡くなったあと未亡人が寄付したりしたものなので謂れがわからず箱にしまわれ片隅に眠っていましたが、今回の調査でそれぞれ博物館等でカタログ化されると思います。これも今回の調査の成果であり、自分の満足のためだけでなく他の博物館等の役に立つことになりました。

皆様のご清聴に感謝致します。

西日本工業倶楽部での講演会の様子